

「量り売り致し口」といふ貼り紙も黄ばみて村の酒屋閉ぢたり

歌集『龍』(2019・10月号)に載っていた谷本史子さん(笠岡市在住)の秀作である。

さまざまの情景を思い描くことができる。そこでの「量り売り」のその一は、小売りである。

儀流のシニアの 神崎 宣武

樽たもとのダボス(下方の取り出し口)の栓を抜いて杓しやくに酒を注いで量る。それを銘々めいめいが持参した容器に移して持ち帰る。戦後(第2次大戦後)しばらくまでは、

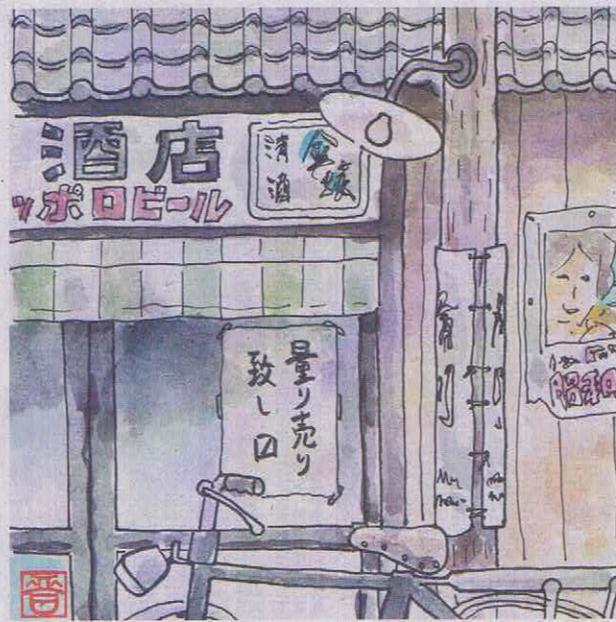
そうした光景がみられたものだ。もちろん、瓶売りもあったが、その時どきの量り売り、すなわち消費者にとっての小口買いが存続していたのである。そ

のことは、内田百閒(岡山市出身)の『百鬼園戦後日記』などで知ることができる。

それ以前の量り売りでは、

量り売り

が十分に普及するまでの間、重用された。酒造元が所有するものが多かったが、販売店の所有するものもあった。そ



世は歌につれ酒につれ

番まで卸したかを記帳しておいて、あとでそれを回収するのだ。販売店では、それを満たして小売りもするが、量り売りの容器にも使った。いづれにしても、番号を控えての回収容器であった。戦後は、そうした貧乏徳利の実用が後退した。回収がされないまま、あちこちに捨てられ、あらぬところに残ることにもなった。

余談になるが、テレビの時代劇では、無頼の徒などがそうした貧乏徳利から酒を注いで飲む場面がでてくる。が、貧乏徳利は、化学釉薬や電話番号からもわかるように近代の所産。時代考証の誤り、というしかない。

私は、そうした貧乏徳利に対して特別な思いがある。かつて、それを収集して歩いたのだ。昭和40年代のことだ。その数は千点を超えようか。民俗学者の宮

現在いまにして思う。
なお、そのコレクションは、現在も武蔵野美術大学の民俗資料室に保存されているはずである。

さて、酒の「量り売り」のもう一方には、そこでの飲用があった。いわゆる立ち飲みをする人に1合単位で売る。あくまでも立ち飲みの便宜のためであって、居酒屋(居座いざって飲む酒)とは違う。江戸の町に流行り、そこから各地に伝わった。酒がハレ(非日常)の飲料として貴重な時代は、2合まで。「ふだんの酒は正2合、まつりの酒は底(酒樽の底)つきるまで」と、といったことくである。

つい近年まで、東京の下町などでは、居酒屋でも2合までしか出さない店があった。これも、いつの間になくなった。世は歌につれ、とかいうが、「酒にもつれて」変わりゆく。ということ、谷本さんの短歌が思いださせてくれた。

陶磁器の徳利が広く用いられていた。俗に貧乏徳利とか通い徳利と呼ばれた。大半が1升入りであった。明治から昭和にかけて、ガラスの1升瓶

れぞれに釉薬で番号が記してある。電話番号が記されているものもある。酒造元ではそれに酒を満たして卸す。どこに何番から何

本第1(1907〜81年)から、「モノに数多く当たって、生活者の合理を考えよ」と命じられた結果だが、それにしてもわれながらよく集めたものだ、と

歳としの暮よるこはがまん(民俗学者)の年賀酒
されどもちよ(民俗学者)と毒味酒 (宣武)